祈りの島「五島」　　2010.4.26～28

明日の世界遺産に出会うロマンの旅

４月２６日～２８日友夫婦と一緒に、クラブツーリズム主催の五島列島の旅に参加した。お天気が心配される空模様だったが、異国を感じさせる歴史と海に山、雄大な自然と島の人々の温かさにふれる旅は心に残るものだった。

まずは新幹線とバスで長崎へ

東浦駅 6.00”の一番電車で名古屋へ、名古屋始発 7.06”の博多行きのぞみ９７号に乗車して一路博多へ向かう。二人掛けのシートを向かい合わせにして、まずは朝飯のおにぎりを食べて新聞に目を通す。なにせ５時起きなので朝飯は食べずに来て、落ち着いてから食べたほうがよかろうと思ったのだ。新大阪を過ぎるとトンネルが多いのが山陽新幹線、時々は外の景色を見ながらおしゃべりをしていると、３時間２１分はあっという間に過ぎて博多駅に 10.27”到着した。ここからはバスで高速を走って佐賀県の嬉野へ、インターを出ると歓迎用の宣伝塔がありそこには「日本三大美肌の湯」とある。

博多駅前

福江港ターミナル

あと二つの湯はどこなのか、ちょうど 12.00”に嬉野陶彩館に到着して「湯豆腐膳」のランチとなる。温泉の湯をつかった鍋でまずまずの味だった、これで少しはお肌がしっとりしたのかな。ゆっくり食事をして 13.00”に出発、14.00”に長崎港に到着した、ここから 14.50”のジェットフォイルで下五島

の福江港へ向かう。五島の福江に行くのには飛行機も飛んでいるが、船はジェットフォイルで１時間２５”、フェリーでは３時間 30”もかかる。上五島へは中通島の奈良尾港へジェットフォイルが、鯛の浦港へは高速船が結び奈良尾港へはフェリーも通う。そして、観光客を呼び込むために上五島空港が造られたが利用客が少ないため今は運航を停止している。

五島はどんな島か

長崎港からおよそ 100km 西に浮かぶ五島は北から中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島の五つの大きな島を中心に、約 140 の島からなり、西海国立公園に指定されている。五島列島は北東から南西に長く伸びているために、全体を大きく二つに分けて、五島市がある五島最大の福江島を中心とする南西の島々を下五島、二番目に大きな中通島を中心とする北東部を上五島と呼ぶ。上五島は中通島以上によく使われるが、下五島の呼び名はあまり使われない。現在の人口は約 60.000 人、そのうち 43.000 人が福江島中心の五島市に住み、上五島に 17.000 人が住んでいる。昭和初期には全国あちこちから出稼ぎに来る漁船団の東シナ海先端基地として栄えた。近年漁獲量は減少しているものの、海産物が名物であることに変わりはない。その代表は水揚げ日本一を誇るアジ、でもよく知られているのは地元で「あご」と呼ばれるトビウオだ。特にこのあごのだし汁で食べるうどんは絶品。ツバキ油を練りこみ、少し細めで腰のある麺は釜ゆでタイプの「五島地獄炊きうどん」が有名。なんでもこの麺は遣唐使が伝えたもので、全国の日本海沿岸地帯に広まったという。そして、自然では連なった山々が海に沈み高い部分だけ残って溺れ谷となった、複雑なリアス式海岸線を持つ地形である。そのため一時は海軍が軍港の候補地として検討したが、結果としては佐世保に落ち着いたといういきさつがある。さらに東の八丈、西の五島と呼ばれて椿の産地でもある。

「五島」の呼び名は中国から伝わった

五島列島に人が住みついたのは早く、一部には旧石器時代に人が住みついていたという。縄文時代や弥生時代の遺跡が多く発見されているのだ。平安時代には後期遣唐使が最後の寄港地とするなど、本土から距離があるとはいえ大陸に近いこともあり、中央の文化と長く隔絶された状況ではなかった。古事記にでてくる「知訶島(ちかのしま)」は五島列島のことで、古くは福江

島を「おおぢか」と呼び上五島のことを「こじか」と呼んでいた。現在は五島列島に入れられていない小値賀島(おじかじま)がその呼称の名残である。また、イザナギ、イザナミが生んだ最後の島「ふたごのしま」は、五島の南に離れて浮かんでいる男女群島のことであるとするのが通説である。この島も女島灯台が置かれるなど近年にいたるまで重要な島であった。このように古代において五島列島は中央にもよく知られていたことが分かる。
８７６年には五島列島と平戸島地域を行政区画として島司が置かれた、その後中世にいたるまで大きな変化はなく戦国時代に倭寇頭目で貿易商人の王直が活動の一拠点とした。倭寇の王直は「五峰王直」の名でも知られるが、この五峰は五島のことである。五という数字を尊ぶ中国の発想から、ヤマトにおける「ちかのしま」は中国からは「五島」と呼ばれるようになり、それが日本にも伝わって五島の呼び名が定着したといわれる。

秘められた信仰の歴史

五島に初めてキリスト教が伝えられたのは永禄９年(1566 年)。１９代領主宇久純克は洗礼を受けてキリシタン信仰を奨励しましたが、天正１５年(１５８７年)に豊臣秀吉が宣教師追放令をだし、続いて慶長１９年(１６１４年)には江戸幕府が禁教令を発布。多くの信者たちはその弾圧から逃れるために潜伏し、カクレキリシタンとして生きることになりました。寛政９年(１７９７年)から信仰の自由を求めて約３０００人の信者が五島に移住。その後、幕府の厳しい弾圧と辺境の地での貧しい生活に耐えながら信仰を続けてきた信者たちは、明治６年(１８７３年)の禁教令廃止とともに堰を切ったように島内に教会を設立していきました。現在上五島には２９の教会があり、信者たちの祈りの場として今も大切に守られています。
平成１９年には「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界遺産の暫定リストに掲載され、青砂ケ浦教会と頭ケ島教会はその貴重な資産として明記されています。

「速い」と「安い」どちらを選ぶ

14.50”定刻にジェットフォイルは桟橋を離れると「まもなく浮上して80㎞の高速走行に入ります、着席してシートベルトを着装してください」のアナウンスが流れる。これまで高速船がクジラか何かに衝突するという事故がた

びたび起きており、高速船もシートベルト着装が普通になってしまった。今ではゆっくり座席に座っておれるのは列車だけで、スピードが速いのもよいが旅の風情も変わってしまった。陸地が視界から消えて大海原しか見えない中ではまるでスピード感がない、エンジン音が変わった気配もなかったが席の前方にあるスピード計は 81km を示していた。その後時々スピード計を見ていたが 82km を上回ることはなく 76km～81km で運航していた。波は 2～3m くらいのようだが船は小さいのでローリングは避けられない、そのうち何となく嫌な気分になった。今までは船酔いしなかったが、この頃はちょっと船に弱くなったみたい。それでも 16.15”福江港に到着しやれやれだが、それにしてもこの船の料金は安くはない。フェリーは２等が２５８０円でジェットフォイルは片道 6410 円なのだ、これではちょくちょく長崎市まで遊びに行くのに使えないのでは?　やはりビジネスか観光用なのだろう。ジェットフォイルは日に４往復、フェリーは３往復しているが長崎空港～福江空港は日に何便飛んでいるのだろう?

長崎港、手前が乗船したジェットフォイル「ペガサス」

福江藩と日本最後のお城「石田城」

港に降り立った４２名は早速観光バスに乗り込む、「五島バス」でガイドはまだ若い山下さん。これから石田城を車窓から眺めて、鬼岳と鐙瀬(あぶんせ)溶岩海岸を見学してから宿に向かう。バスが走り出すとすぐに港内に石垣の上に小さな祠みたいなものが見えた、後で調べると「常灯鼻」と呼ばれる灯台だった。石田城(福江城)は当時三方を海に囲まれた海城で、お城建

設にあたり北西風による大波を防ぐ防波堤の役割のほか、灯台としての役割をもっていた。石垣は城壁と同じ野面積みで、激しい風雨にさらされてきたが、築造から百数十年経った現在でも少しも崩れていないという。間もなくしてお堀と石垣が見えてくる、この福江藩は五島藩ともいう、その名の通り肥前国(長崎県)五島列島全域を版籍奉還まで外様大名の五島氏が治めた。藩の成立は慶長８年(１６０３年)に初代藩主の五島玄雅が徳川家康に謁し、１万５千石の所領を認める朱印状を賜ることに始まる。寛永１２年(１６３５年)には領内の検地を実施し、曖昧であった家臣団の知行高.序列を決定した。さらに慶長１９年(１６１４年)に焼失した江川城に変わって、寛永１４年(１６３７年)石田陣屋を建設して藩庁にした。五島氏は築城を幕府に願い続けたが、藩の財政難もありなかなか実現しなかったが、異国船を監視、海上防衛に備えるとの目的で、幕末の嘉永２年(１８４９年)五島盛成の代に築城が認められた。盛成は海辺への築城に際し福江川河口に、今日でいう灯台にあたる常夜灯「常灯鼻」を建設、さらに波の影響から城を守るために陸へと続く導水堤(防波堤)を完成させた。

常夜灯の「常灯鼻」

石田城

海城の築城には財政難や特有の問題もあり、最後の藩主である盛徳の代になった文久３年(１８６３年)になりようやく完成させた。石垣は自然石を積み上げた野面積みである、土地の人は石田の浜にちなんでつけられた通称の石田城と呼ぶ。現在、本丸跡に五島高等学校、北の丸跡に五島観光歴史資料館や市立図書館、文化会館が建てられ、二の丸跡には五島氏庭園が往時の姿を今に伝えている。 そして信号のある交差点を左折すると武家屋敷通りで、

石垣に囲まれた屋敷が続く落ち着きのある街並みが続く。その石垣の上にはかなり大きめの玉石が積み上げられている、これは「こぼれ石」といい屋敷に侵入する者がいると玉石が落ちて、音で知らせるものという。

五島のシンボル「鬼岳」と鐙瀬(あぶんせ)溶岩海岸

武家屋敷から２５分も走ると鬼岳に到着する、地元では「オンダケ」と発音するこの山は、数年ごとに野焼きをする。そのため灌木もなく緑の草に覆われており、美しいその姿は遠くからでもすぐに分かる。その駐車場に松の木の姿をした「南洋杉」が一本立っている、確かに見たところは松の木としか思えない不思議な杉の木だ。そこは山のふもとでありすぐ目の前は海が迫る溶岩海岸、先に海を見渡す展望台へ行ってみる。ゴツゴツした溶岩に波しぶきの上がる海岸が続き、溶岩の背後は緑の灌木で覆われている。特異な景色はすばらしいが顔に吹き付ける風も強くてたまらない、振り返ると緑の美しい鬼岳があった。展望台から後ろを見ると近くに畑があり、なにやら背丈の高い野菜がある。ガイドの山下さんに聞いてみるとソラマメだという、ほんとかいなと畑まで行くと背丈は 2m もあるソラマメでびっくり。大きな豆もたくさんついており間違いなくソラマメだった。

とても大きなソラマメ

形の美しい鬼岳

駐車場に戻り今度は鬼岳の展望所に登った、草はらの気持ちがよい場所だがここも風が強くてたまらん。それでも街や海を眺める景色は抜群で、風のない日に寝転がって空を眺めてみたい気持ちになる。しかし、ここの地形からすれば風のない穏やかな日はほとんどないのだろう。この鬼岳は火の岳、白岳、城岳などと形成される鬼岳火山群の主峰で、直径５００M の旧噴火口を

持つ標高３１７ｍ の比較的新しい火山である。山の下北西に福江空港があり飛行機がターミナルに移動するのが見えた。風が強いので早々にバスに戻ったが、途中には立派な天文台もあった。

鐙瀬(あぶんせ)溶岩海岸

鬼岳の駐車場にて

五島コンカナ王国に宿泊

ここから１０分ほど 18.00”少し前に今日のお宿「五島コンカナ王国」に到着した、「コンカナ」というのは「来てね」の方言だという。鬼岳のふもとということで一応温泉となっていた、でも温泉は露天ぶろだけで内湯は温泉ではなかった。せっかくなのでもちろん露天風呂に入ったが、お湯は茶褐色で有馬の湯みたいだった。しかし、効能をよく見てみると源泉は２６度 C となっていたから、沸かし湯なのだ。温泉を出ると楽しみは食事、18.50”よりオランダ屋敷でのメニューは小鉢はもずく、椀は五島うどん、お造りはタイ、ブリ、キビナゴ。でもお品書きにはキビナとある、陶板は五島牛のすき焼き、エボダイの煮つけ、サザエ．エビなどの海鮮グラタンにサザエの炊き込みご飯とみそ汁。たくさんのごちそうが並び満足.満足……こうして旅の初日は暮れた。

二日目

今日は福江島をぐるりと巡り、中通島へ渡りいくつかの教会を訪ねる。
そして、夜は上五島夜神楽を観賞する予定。

島の中央部を走って「大瀬崎」へ

8.00”に宿を出て最初は大瀬崎断崖へ向かう、周囲250kmの福江島の海岸線を行くと思っていたが案に相違して島の中央部を横切るコースだった。ここ福江の春は相撲で始まる「へとまと祭り」があり、3mの藁草履に娘を乗せて奉納するそうだ。海に囲まれており漁業が盛んと思われるが、実は漁業よりも農業が多くて70%を占めるという。ジャガイモ、葉タバコが主産物と言うが、焼酎の原料となる五島イモ.五島麦も栽培されるし、昨日見たソラマメも素晴らしいと思う。周りを海に囲まれた島でありながら、漁業よりも農業が盛んになるなんてなぜだろう? それだけ魚の消費が少なくなってしまったということか。まもなくして猪掛峠を越えるが、ここら辺りは猪が多かったことから着いた呼び名という。そんな猪にまつわる民話を話してくれた。

民話「くすさんくすさん」

この地方では大晦日までに猪を神社に奉納するしきたりがあった。一人の若い猟師は今年は猪がなかなか獲れずにとうとう大晦日になってしまった。今日は何としても猪を獲らなくてはと悲壮な気持ちで出かけようとすると、身重の妻が「私は初めてのお産なので心配でたまりません、どうか今日だけは家にいてください」と懇願した。しかし、若い猟師は村のしきたりは守らなくてはならず、やむを得ず妻を残して家を出ました。でも、今日も猪は獲れず思案に暮れていましたところ、雨が降り出してきました。大きな楠の洞穴で雨宿りをしていました。すると奥の方からぼそぼそ話し声が聞こえてきました、その声は「今日生まれる娘は7歳までしか生きられない」というのです。それを聞いて我が家に帰ってみると、かわいい女の子が生まれていました。猟師は喜びよりも先ほど聞いた話が耳を離れず、妻にもそのことは言えませんでした。そのため女の子をとても可愛がりました、そしてついに女の子が7歳になる日がきました。その日、猟師は女の子にたくさんのごちそうを持たせてやりました。出かけた女の子は化け物に出くわします、そこで女の子は持っていたたくさんのごちそうを食べさせて時間を稼ぎました。すると化け物は時間が経ちすぎたことに気が付き、あたふたと逃げ帰りました。難を逃れた女の子は7歳ではなく88歳まで元気に暮らしたといいます。

大瀬崎断崖と灯台

コバルトブルーの海と白い灯台

島の中央部で県道が十字に交差する二本楠に出る、ここを左折して進むがこの辺り 2.2km の直線道路となっている。なんでも長崎県下二番目に長い直線道路という。ちなみに一番は雲仙にあるという、そこからかなたの山には風力発電機が二機建っていた。これは島内で使う電力ではなく売電が目的だそうだ。ここからしばらく走ると海沿いの国道 384 号中須にでる、この辺り昔は養蚕が盛んだったというが今はアスパラなどハウス栽培が中心になっている。そして、中川トンネルを超えると玉の浦中学校でなんと生徒数 38 名にたいし先生は 13 名、生徒 3 名に一人の先生がいるというから驚きだ。おそらく昔はもっと生徒数が多くて先生の数もちょうど良かったに違いない、それが時の流れとともに大きく変わってしまったのだろう。そして軍港の候補地にもなった玉の浦湾沿いに進むと、シーズンにはサンマが見られるというサザメ湾を横目に大宝地区に入る。おとなりのタチヤ地区はカトリックだがここは仏教、空海の開いた真言宗の大宝寺があり左甚五郎の作品もあるという。そこからほどなくして 9.15”大瀬崎断崖展望所に到着した、コバ

ルトブルーの海につき出た半島の先端に白い灯台が建つ景色はすばらしい、何回もシャッターを押したが、また押してしまうのだ。果てしなく広がる南シナ海に突き出た大瀬崎は高さ 100m～150m の断崖が 15km にわたって連なり、西海国立公園を代表するビューポイントになっている。この灯台は明治 12 年(1879 年)に完成し、昭和 46 年に改装されたもので全国でも最大級の 200 万カンデラの光を発し、沖合 50km まで光が届く。長年にわたり日本列島の西端を航行する船の安全を見守ってきた。また明治 31 年には無線電信機を備えた旧海軍の望楼が建設されており、明治 38 年日露戦争のおりにバルチック艦隊発見の報「敵艦隊見ゆ」を受信しているとか。でも無線ならどこでも受信できたのでは…….?。すばらしい眺めを満喫してすぐ近くにある井持浦教会ルルドへ向かう。

五島最古レンガ造りの「井持浦教会」とルルド

尾根伝いから谷へ下りていくこと 5 分もすると教会に到着した、道路わきの駐車場には赤いポストの隣に「井持浦教会」の説明板がある。その説明板は日本語はもちろんだが英語の説明のほかに、韓国語と中国語の説明が併記されており、韓国と中国の観光客が多いことを示している。道の反対側はかなり低くなって入江になっている、そこは埋め立てられて運動広場が造られていた。公共の施設などで広いスペースを必要とするものは、平地がないのでほとんどが埋め立てて造られているのが分かる。

井持浦教会とルルド

ここ井持浦教会は明治 30 年(1897 年)に創建された、五島で初めてのレンガ造りの教会である。現在の聖堂は昭和 62 年に改装されたもの、また敷地内にあるルルドは明治 28 年アルベルト．ペルー神父により提唱され日本で初めて建設された。ルルドというのはフランスのビレネー山麓にある街の名前で、1858 年に薪を拾いに行った少女ベルナデッドが近くの洞窟で聖母マリアに出会い、聖泉を示されたという故事に由来するカトリックの聖地。その聖泉を飲んだり浴びたりすると、病が癒されるなど奇跡が現れるとされている。井持浦のルルドは五島全国から選ばれた岩石で造られ、内部にはマリア様の像が安置されている。傍らの井戸には聖地ルルドの聖泉の水が混入され祝別されており、以降この地は第 2 のルルド霊泉地として全国から多くの信徒が訪れているという。坂を少し上がると石垣が組まれて、平らなスペースを確保した狭い敷地にそびえたつようにレンガ造りの教会が建っている。色調といい優雅さも漂う建物だ、当初は側面に連続アーチからなるロマネスク調の吹き放ちの廊下があったが、信徒の増加により手狭となり改築されたという。見学を終えて 10.15”次は島の北西に位置する三井楽へ向けて出発した。

バスは来た道を中須まで戻るのだが、10 分も走った海辺の水田ではすでに田植えが終わっていた。こんなに海に近くては塩害がでないのだろうか? 味の良いお米がとれるのだろうかと気になった。中須を過ぎてしばらくすると荒川温泉を通る、ここの温泉は三度入るのはよいが四回入ると効能が消えてしまうといわれる。どうしてそのように言われるのかちょっと不思議ではある、そして、ガイドの山下さんの話で「ゴンドウクジラ」は「五島クジラ」が語源だとか、ほんとかいな。魚については「栽培漁業センター」なるものがあり、ここでは魚を育てて半分は稚魚、半分は成魚になってから放流するそうだ。その際には印をつけて放して、魚がどのあたりまで移動するのか調査している。結果もっとも遠くまで行ったのは北海道沖で捕獲されたというから驚きだ。人間ではとても泳げないが魚の体力はどうなっているのかな? 11.00″高浜海水浴場に着いて小休止、「日本の渚.百選」「日本の快水浴場.百選」にも選ばれている日本屈指の海水浴場としてあった。確かに海と山と砂浜はすばらしい眺めで、五島列島を北限とするサキシマフヨウが生息し、春は海水に浸かっても花が咲くハマジンチョウ、夏にはサキシマフヨウが花咲くという。ここから 10 分程で三井楽の遣唐使ふるさと館(道の駅)に到着した。

「日本の渚. 百選」「日本の快水浴場. 百選」の碑

道の駅「遣唐使の館」

遣唐使船が最後に立ち寄り、今は電気自動車が走りまわる島

初めに道の駅隣の焼酎工場を見学した、若いお兄ちゃんが 42 名ものおじさんおばさん相手に、焼酎のできるまでを大きな図を用いて説明してくれた。五島産のサツマイモを使った芋焼酎と麦を使った麦焼酎を作る工場が 2009 年に完成したそうだ。建物の外から工場を見て試飲コーナーへ、少し口に含むだけで口の中が熱くなる。焼酎にあまり関心がないので外に出てみる、赤く塗られた遣唐使船が石垣の台座の上に置かれてひときわ目を引く。遣唐使船の前はバス停になっておりダイヤを見ておどろいた、朝の始発 6.33”の福江行きの前に「学」の字がついているので、何かと思い注釈を見るとそこには「五島高校の補修授業がない時は運休」とあったのだ。地域密着とはこのことだと思った次第。そこから少し離れた遣唐使ふるさ館の大きな看板の向こうには、屋根に鯱が乗った御殿のようなお屋敷が白壁に囲まれていた。これではまるでこの家が遣唐使ふるさと館かと間違いそうだった。遣唐使ふるさと館はなかなかしゃれた造りでレストラン、お土産コーナー、に大画面のシアターも併設しているという。お昼少し前にランチとなった、五島うどん、海苔巻き、いなりずし、スパゲッティーなどのバイキングにデザートもたくさんあり満足した。

遣唐使船　道の駅の名前にもなっている遣唐使と五島の関係はというと……7 世紀から 9 世紀にかけての中国は、世界の大国と言われ「唐」と呼ばれていました。その唐のもっとも進んだ政治の制度や、文化. 技術を取り

入れるために日本から遥か遠い唐の国へ遣唐使が派遣されました。大阪府の難波津から遣唐使船に乗り込み、瀬戸内海を進み福岡県の筑紫の那の津で一旦停泊して風待ちをします。これより先に唐へ渡るコースは三つあり、初めは朝鮮半島の沿岸を航海する比較的安全なコースをとっていましたが、新羅との関係が悪化してからは東シナ海を渡って揚子江の河口を目指す南路をとりました。また、風の影響で南路を取り損ねた場合には薩摩から奄美大島など島伝いに航海することもありました。中でも、五島列島福江の西北端となる三井楽を通る南路は、中国大陸への最も近いルートでした。でもとても危険な航路でもありました、運よく中国大陸に着いたとしてもそこから長安までの長い陸路の旅が始まるのです。このように日本最後の地三井楽で別れを告げた遣唐使たちは、東シナ海の大海原へと長く危険な航海に乗り出したのです。こうして 630 年～894 年に廃止されるまで、幾度となく繰り返された遣唐使は、幾多の試練を経て様々な犠牲を払いながらも、日本の政治や宗教に多大な影響を与え、日本文化の礎を築いていったのです。

遣唐使船

電気自動車の充電スタンド

島には 40 台の電気自動車が……食事を終えて外に出ると何かガソリンスタンドみたいなものがあった、よく見てみると電気の充電スタンドだった。愛知の地元ではまだお目にかかったことはない、その時は車がなかったが周りをぐるりと回ってくると、三菱の電気自動車が止まって数人の人が取り巻いていた。私も電気自動車の充電は見たことがないのでそばへ行ってみた。ネームプレートをつけた市役所の職員と思われる若いお兄ちゃんが、充電コー

ドを車にセットしようとしていたがなかなかできない。時折スタンドに表示された説明を確認しながらやっていたがうまくできない、その時誰かが助け船を出して「ここの〇〇さんならよく知っているぞ」というので若いお兄さんは呼びに行った。急ぎ足で来たのは意外にもまだ若いお姉さんで、サッササとコードをつなぐとカチャと音がして充電コードはいとも簡単にセットされた。思わず観衆から拍手がわきおこり、めでたしめでたし。このお兄ちゃんに聞いてみると、五島市には 40 台の電気自動車があり利用されているという、でも充電スタンドはここ一か所とか。料金は 20 分/回の充電で 150 円という。それにしてもこんな離島で先進的な取り組みが進んでいるとは驚きだ。離島なるがゆえに魅力ある島づくりを一生懸命に考えているのだろう、どこかの町の関係者にも勉強してもらいたいものだ。

チャーター船でキリシタン洞窟へ

食事も済んで福江島の観光は終わり、次はキリシタン洞窟へ行くために 12.40”出発し福江港へ向かう。岐宿の町を通り福江に入ると、一番大きなショッピングセンター「椿屋」とドラッグストアが並ぶ。その先にトヨタカローラ店があり、「チャンココババ」「ウマセミババ」というおかしな名前の交差点を通り港に着いた。13.30”にチャーターした派手な黄色の海上タクシー「あさかぜ 7」は出航してキリシタン洞窟へ、この洞窟は中通島の手前にある若松島にある。福江島を出て久賀島、奈留島までが五島市で、若松島、中通島、小値賀島は新上五島町となる。
40 分程で若松島の南端に到着する、弾圧を逃れてキリスト教信者たちが隠れ住んだという洞穴や岩の裂け目があり、白いマリア様の像が置かれていた。波が少し荒くて上陸はせずに船から眺めるだけで移動することになった。若松島と中通島の間の若松瀬戸を通り、両島に架かる若松大橋をくぐり中通島の西の港「郷ノ首」に 14.30″到着した。上陸すると小さな道の駅ならぬ「港の駅」があり、となりには自販機もあったので早速缶コーヒーをいただく。そこへ子供が二人やってきたので何年生か聞くと、5 年生と 2 年生という。さらに同級生は何人?と聞くと 5 年生は 9 人、2 年生は 3 人だと言ってさっさと行ってしまった。話し相手としては面白くないと思われたようだ……

世界初の洋上石油備蓄基地

　ここからは西肥バスでガイドは小田さん、福江のガイドの山下さんは背が高かったが、小田さんは小柄の純日本風のタイプ。初めのうちはさほどでもなかったが、その話しぶりは機関銃のごとくそのうえ一人で漫談をしているかのごとく、休むことなくとても面白くかつ楽しいガイドをしてくれて、間違いなく五島の忘れえぬ一人である。バスは港を出ると小川に沿って進み、間もなくすると学校の横を通りたくさんの鯉のぼりが泳いでいた。最近はあちこちで見られる風景だが気持ちの良いものだ。
これから中通島の西側を北上して那魔湾の矢堅目(やがため)へ、この矢堅目は東シナ海の警備に矢を持って見張りをしたことから「ヤガタメ」となったという。この矢堅目で塩づくりを見て青砂ケ浦教会を見学後ホテルへ向かう予定。20 分ほど走ると跡次の集落で、リアス式の海岸に世界初の洋上石油備蓄基地が見えてくるこの辺りは石油備蓄基地を背景に、はるかかなたに落ちる夕陽が見事な景観で知られている。

洋上の石油備蓄基地

この施設は我が国の造船.土木技術の粋を集めて S63 年に建設された、三菱造船が建設したもので一隻の大きさは長さ 390m×幅 97m×深さ 27.6m の鋼鉄製貯蔵船が 5 隻連なっている。一隻で日本の消費量 1.2 日分、5 隻で 6 日分の量を貯蔵しているという。こんなにたくさんの石油を貯蔵している五島だが、そこは離島なのでガソリンは 160 円/L と高いのだという。それにこの辺

り以前カッパサミットが開かれており、ガタローというカッパのモニュメントもあるという。春は稲作、秋はアゴ漁の半農半漁の集落ばかりの島に 29 もの教会があるのが五島の中通島である。

青砂ケ浦天主堂

ステンドグラスが美しい国重文「青砂ケ浦天主堂」

15.20”に海沿いにある矢堅目の塩本舗に到着、塩づくりの実演を見て塩製品他の買い物タイムとなる。どんなものがあるのかサッサと見て外に出る。入江の景色は青い空よりも碧い、コバルト色の海がとても美しい。入江の入口にとんがり山の小さな島が一つ、対岸には岸辺に民家が固まっているのが見える。ここにも絵になる島の風景が広がっていた。
15.50″ここを出発して 16.10″に青砂ケ浦天主堂に到着した、この天主堂は郷土出身の鉄川与助により明治 43 年(1910 年)に竣工したレンガ造りの重層屋根構造である。正面はレンガによる帯状装飾によって三分割され、内部は白壁に薔薇窓や縦長アーチ窓によって飾られ、植物模様の装飾を施した円柱で支えられているが、この白壁は愛知県の左官により漆喰で修理が施されたという。日本人設計者の手で建設されたレンガ造り教会堂の初期のもので、かつ本格的教会堂建築の基本である重層屋根構造に基づく、外観や内部空間が形成されるようになった初めてのものといわれる。天井の高い広い空間は白壁に茶色の円柱のコントラストが美しく、かつ荘厳な雰囲気をかもしだして

いる。普通室内の写真撮影は禁止だが、小田さんは OK というので広い空間とステンドグラスをカメラにおさめることができた。このあと見学を終わり 17.40”にホテルマリンピアに到着した。

青砂ケ浦天主堂の内部

夜は鯨を賞味して「五島神楽」を観賞する

二日目の宿はホテルマリンピア、温泉ではないので食事前にお風呂へ行く気分にはならず小休憩。18.00”から夕食は和室の大広間で会席、席に着くとテーブルには伊勢エビがでんと置かれているではないか。すごい、お品書きには小鉢、お造り、盛りとあって伊勢エビ姿造り、焼八寸は銀むつ西京焼き.さざえ田楽.紅梅クラゲ、酢の物には塩くじらの温引き、さらに五島チャンコ、五島牛の陶板焼き、サザエご飯、伊勢海老のみそ汁、デザートとある。珍しいのは鯨の酢の物だが、こんな高級なものは食べたこともなく興味があったが、味はおいしいというものではなかった、妻も同じらしく見ると残していた。古来より捕鯨が盛んだった上五島、特にここ有川地区の捕鯨の歴史は古く、約 400 年前の慶長年間に紀州から捕鯨の技術が伝わったという。S30 年代、貴重なタンパク源であった鯨は、今でもさまざまな鯨料理が地元ならではの食文化として受け継がれています。美味なる食事に満足して 19.20”ホテルのマイクロバスで五島神楽(国選択無形民俗文化財)を観賞するため

神社へ向かう。当初は青方神社の予定であったが、有川神社に変更されたという。通りから三つの鳥居をくぐって階段を上がった所になかなか立派な本殿がある。でも我々はバスで本殿前に横付けしてもらい社殿に入る、なかなか広くて立派な造りだ。地元らしき人も十数人はいただろうか、外国人も 2.3 人見受けられた。19.40”宮司らしき人が小さな声でぼそぼそと説明をして神楽が始まった。右手の掲示板に演目を書いた小さな紙が貼られて、そこには①折敷(おしき)　②二剣(春三月)　③恵比寿舞④獅子舞　⑤八鍔 と書かれていた。最初の折敷(おしき)は青年が両手の平にお盆を持って踊るもの、腕を振り回し、体を大きく回しながら腕を振るがお盆は落ちずに手に吸いているかのようだ。二剣(春三月)は小学生の男の子二人が紙のとんがり帽子をかぶり、手に剣を持って舞を舞うもの。恵比寿舞は釣りざおを持った恵比寿さんが釣りをしている舞で、最後にタイを釣りあげるというもの。獅子舞は獅子と天狗がじゃれあう舞でなかなかユーモラスでおもしろかった。最後の八鍔は絣の着物姿で畑仕事をしている舞を、若くて体格の良い青年が演じた。

獅子舞の様子

それぞれが 10 分ほどの舞が終わると、意外にも餅なげが始まった、先ほどの踊り手が 3.4 人でタケミに入った餅を投げるというよりみんなの前にまいた。この時私は写真を撮るために後ろにいたが、それでも遠くに飛んできた

餅を 5 個キャッチした。妻は前に座っていたので 10 個拾った。珍しい神楽の観賞のみならず、余興に餅ひろいまであってみんな大喜びで 20.50”ホテルに戻った。

三日目

今日は中通島の教会を二つ訪ね、鯨賓館を見学した後に五島地獄炊きうどんのランチを食べて三日間の行程を終える。

朝の蛤浜を散歩する

今朝はゆっくりの 8.20”出発なので 7.00”からの朝食をすませて少し散歩に出かけた、ホテル前の大通りを左手に進むとバス停の所に蛤浜の案内が目についた。パンフレットにも載っていたので行ってみようと右折した、ちょうどホテル前にグランドがあったのでそこをぐるりと回って帰ればよいだろうと思ったのだ。大通りから少し入った所に一軒の民宿があり、おかみさんが庭の掃除をしていた。「おはようございます」と声をかけると「おはようございます」と丁寧なあいさつが返ってきた。その先には畑があり鬼岳で見たようなソラマメがあった、背丈は 2m もなかったが大きな豆がたくさん実をつけていた。その先の家に面白い看板があった、そこには「貸別荘竜馬別邸 洗心」と竜馬の名前を使っているのだ。どんな意味があるのか知らないが、ここ有川地区には坂本竜馬ゆかりの広場があるので、それにちなんでつけられたようだが…….。
そして人のいない静かな蛤浜海水浴場に着いた、「日本の水浴場８８選」「快水浴場百選」に認定されているという、白砂と松林の続く海辺にはハマユウがたくさん自生していた。遠浅という海岸は潮が満ちていて見られなかったのが残念。そこから少し行くとグランドで、回りはジョギング用と思われる茶色の舗装がしてあり、ジョギング姿のおばさんが一人走ってきた。グランドを回ると向こうの大通りに出られるか聞くと、軽くうなずきながら走って行った。安心してグランドを回っていくと大通りからの出入口が見え、そこへ先ほどのおばさんがグランドを回って軽快に走ってきた、いつも走っているみたいだが何周回るのかな?

因縁で結ばれているマリア様と日本

8.20”ホテルを出て５分も走ると鯛ノ浦教会に到着した、以前は中野教会と呼ばれていたが手狭となり信徒世帯当たり８０万円を負担して新築されたという。旧聖堂は教会のイメージ通りの建物だが新しい教会はコンクリートの殺風景な建物でしかない。敷地内にルルドを設け、慈愛に満ちたマリア様を祀っている。そして、美しいたたずまいの旧聖堂の鐘楼の一部には、原爆で崩壊した長崎浦上天主堂の被爆レンガが使われており、今は資料館として保存されている。これらの内容を記したブルーの説明板には五島椿が描かれて、英語のほかに韓国語と中国語の説明もある。
新聖堂の内部は柱がなくて真っ白な壁で仕上げられており、広くとても明るい雰囲気があるのに対し旧聖堂は茶色の柱が並び、かつ柱と柱をアーチ状に結ぶ茶色の木がきれいな模様を描いており、とても美しい。ここで面白い話をカトリック教会のハンドブックで見つけました……

新聖堂

旧聖堂

日本と聖母マリア　日本にキリスト教を伝えたフランシスコ．ザビエルは１５４９年８月１５日鹿児島に上陸しました。それは聖母マリアの被昇天の祭日にあたりザビエルは、日本を聖母マリアに捧げました。それかどうか日本の歴史的な出来事と、聖母マリアの祝日が重なっている事実があります。
日本が真珠湾を攻撃し太平洋戦争が始まったのは１９４１年１２月８日。カトリック教会では１２月８日は、聖母マリアがその母聖アンナの胎内に宿ったことを記念する「無原罪の聖マリアの祝日」です。そして、終戦の１９４５年８月１５日は聖母マリアの被昇天の祭日で、さらにサンフランシスコ講

和条約が調印された１９５１年９月８日は「聖母マリア」の誕生日です。日本の建国記念日２月１１日は「ルルドの聖母の祝日」となっています。偶然とはいえちょっと面白いお話です、お話には続きがあって、バチカン市国の建国記念日も２月１１日。そのうえムッソリーニとローマ教皇庁のガスパリ枢機卿の間で締結されたラテラノ条約によってバチカンは国家主権が認められました、その調印式に使われたテーブルは桜材でできた日本製だったといいます。

日本人が設計した石造りの「頭ケ島(かしらがしま)教会」

鯛ノ浦教会から２５分ほど走って国指定重要文化財の「頭ケ島(かしらがしま)教会」に到着した、この教会は弾圧を逃れて頭ケ島に移り住んだ信者たちが、自ら切り出した砂岩を積み上げて造った西日本唯全国でも珍しい石造りの教会だ。外観の重厚さとは異なり、天井は二重のハンマー．ビーム架構という珍しい造りになっている。こうした造りは他の教会では見られず、教会建築の先駆者「鉄川与助」による新しい空間創造の記念的建築といわれる。

石造りの教会を背に

簡単に言うと船底天井で、木造の天井に花柄をあしらい優しい雰囲気を醸し出している、そのうえ柱がないのでとても広く感じる。明治２０年に創建、現在の聖堂は明治４３年に着工し大正６年に完成しました。

創建時の原型をそのまま保存し、今も教会堂として使用されています。教会堂の隣には牧師さんが住んだ司祭館があり、キリシタンの拷問に使われた石の塔や、その他の記念碑がある。少し離れた海沿いにはキリシタン墓地があり、十字架をかたどった墓標が海沿いに並び、日に照らされて浮かび上がるシルエットは厳かな光景に包まれるという。５月には赤いマツバギクがカーペットを敷き詰めたように咲き乱れ、打ち寄せる波の音と、潮風に抱かれてひっそりとたたずむキリシタン墓地は、訪れる人々に悲しい歴史を語りかけています……。

海辺のキリシタン墓地

船底天井の室内

教会建築の先駆者「鉄川与助」　彼は明治１２年現在の新上五島町に生まれ、小学校卒業後に大工修行を重ねる。明治３９年に家業を継いで建築家としての道を歩み始めた。与助が初めて教会を設計したのは明治３２年で、その後野首教会、楠原教会、今村教会を手掛けた。大正６年には有川地区に全国でも珍しい石造りの頭ケ島教会を完成させるなど、構造と意匠が一体となった数多くの教会を建設し、日本近代建築史に輝かしい功績を残している。

鯨賓館と元横綱佐田の山

頭ケ島教会の見学を 10.00”に終えて、来た道を戻り有川港の隣にある鯨賓館へ向かう。谷底から尾根まで上り今は飛行機が飛んでいない上五島空港に立ち寄ってくれた。小さいながらも立派なターミナルは何と民間会社が借りて研修所として使っているという。饒舌なガイドの小田さんに言わせると、８人乗りのセスナが飛んでいたが、席は指定ではなくお客さんを見て飛行機

のバランスをとるため体重により右の席、左の席と指示されるとか。山を削り取って造られた 800m の滑走路を飛び立つと、飛行機は空に向かうというより海に向かってぐらりと揺れる…….と漫談調で話してくれた。長崎へ５便、福岡へ２便飛んでいたが、いまはその雄姿もない。でも空港を作るために橋が架けられて、行き先を亡くしたバスが谷底の集落まで走るようになり住民には便利になったという。この辺りは猪が多いということで畑のあちこちに網が張ってある、猪だけでなく鹿もいるという。
10.25”鯨賓館に到着し、その昔有川湾で鯨を捕っていた時の様子を描いた絵図や、ノルウエーの技術を取り入れた近代捕鯨を最初に取り入れたのが有川で、そのパネルなどを見学した。中でも鯨のヒゲで造られた応接セットはとても珍しいものだった。二階には新上五島町内の２９の教会と、町内出身で多くの教会を設計した「鉄川与助」のコーナーがあった。それに元横綱の佐田の山はここ有川の出身ということで、横綱を紹介するコーナーもあった。五島に来るまで佐田の山がここの出身とは知らず意外な発見で、鯨賓館の隣には立派な土俵入りの像もあった。

鯨のヒゲで造られた応接セット

「ワイル．ウエフ号」の模型

坂本竜馬と上五島

鯨賓館の一階フロアーに「ワイル．ウエフ号」の模型が置かれ、坂本竜馬ゆかりの地.上五島の掲示があった。慶応２年(1866)５月２日、幕末の志士坂本竜馬が長崎で組織した日本初の貿易商社「亀山社中」が所有する洋型木造帆船ワイル．ウエフ号が、長崎から鹿児島への航海中猛烈な暴風雨に巻き

込まれて上五島. 潮合崎沖で遭難し、乗組員１６人中１２人が亡くなった。鹿児島旅行中に悲報を聞いた竜馬は一カ月後同志を率いて現地を訪れ、地元の庄屋に資金を渡して慰霊碑の建立を依頼し、自ら碑文を書いたと伝えられている。遭難現場に近い江の浜の共同墓地には、竜馬の依頼で建立された１２人の殉難者の名前が刻まれた慰霊碑が、遭難から１４３年もの月日が流れた今も、地元の人々によって守られている……とあった。
昭和６２年には潮合崎沖を望む高台に「竜馬ゆかりの広場」が造成され、ワイル．ウエフ号の舵取り棒のレプリカがある。舵取り棒の実物はゆかりの広場近くの民宿「潮騒」に保管されているという。

ランチは五島地獄炊きうどん

11. 10″少し早目の昼食となった、鯨賓館のすぐ近くのお店で五島地獄炊きうどんを賞味する。この地獄炊きと言うのは、「すごくおいしい」が五島では「しごくおいしい」となる。このしごくおいしいが「じごくおいしい」と聞こえたことから「地獄炊き」と言われるようになったという。

鯨見山から見た有川の町

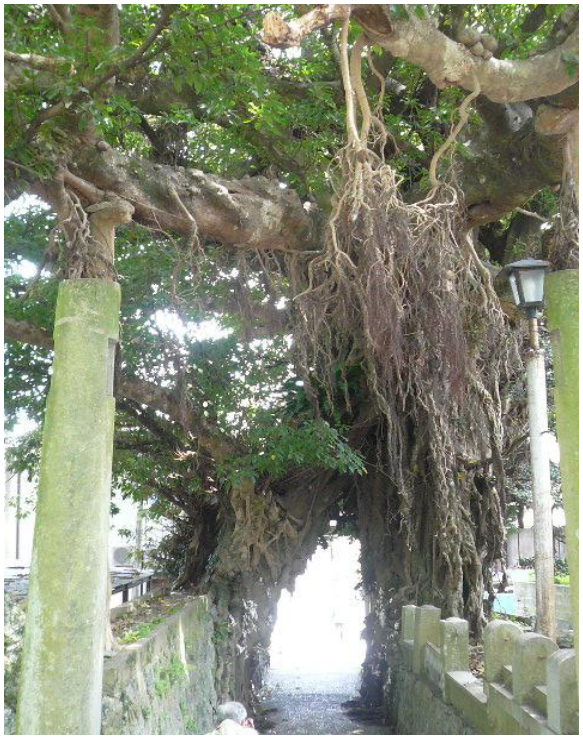
ナガス鯨の骨を使った鳥居の海童神社

お寿司とうどんのセットでなかなかいける味だった、うどんはブラシのような歯数の少ない竹串ですくう。これだとうどんがずるずると落ちることもなく、楽に椀へ入れられるのだ。アゴのだし汁は薄味と思いきやなかなかどうして、これがうまいのだ。おなかいっぱいになるまで食べて、汗をかいてしまい暑くてかなわないので早々に店を出た。店の前はコンビニなどもある広場になっていて、桟橋の一角だった。そこからは有川港の桟橋とターミナル、

先ほど見学した鯨賓館も見えて、その背後に小高い鯨見山がある。この山は有川湾で捕鯨が行われていたころ見張り台が置かれた山だ。その山のふもとには海童神社がある、元和６年(1620)水難防止を祈願して龍神を祭ったのが始まりという。昭和４８年に捕獲したナガス鯨のあごの骨を使った鳥居があることで知られている。

奈良尾の巨木「アコウ」を見学

予定の見学を終わり 12.00”奈良尾港に向けて出発した。奈良尾は遠洋巻きあげ漁業で栄えたところ。２年も船に乗れば家が建つと言われたものだという、その奈良尾で知られるのが「アコウ」。アコウは「くわ科」の暖地性植物、日本では西南地方の海辺に自生している。



アコウの樹

バスを降りて小さな商店街を行くと、奈良尾神社の入口に人がくぐれる高さで根本が二つに分かれた巨木が、鳥居と付近の家の屋根を覆うように広がっ

ている。この地には渡り鳥が媒介して育成したものらしく、樹齢６５０年（２０００年現在）で国指定の天然記念物になっている。とてもでかくて素晴らしい生命力をもつ御神木にあやかり、家族の健康と息子のお嫁さんが見つかりますようにと奈良尾神社にお参りをした。
その境内ではお茶とお菓子の振る舞いがありごちそうになった、小豆入りの羊羹でとてもおいしかった。これは商店のおばちゃんがサービスしてくれたもので、ぜひお土産にという PR だった。なかなかの好評で皆さんがお店に立ち寄り買い求めた、15cm ほどの小さな羊羹で３５０円、わたしも母のお土産にと一つ買った。こうしてすべてのスケジュールを終えて 13.10”奈良尾港に到着した、予定ではジェットフオイルではなくて 13.40”のフェリーに乗る。でも「本日の船便」という案内看板があり、そこには 13.40”の便はなかった。どういうことかとあたりを見まして見ると、窓口の上の壁に張り紙がしてあって３便の時刻が記入されていた。その中の２便目には紙が張って 13.40”と修正してあった、でも窓口の前にわざわざ案内看板が出してあるのに書かれていないのだ。なぜだろう？　この状態で窓口に来たら間違いなく案内看板を見て 13.40”の便があるとは気づかない。
これまで五島の良いところばかり見てきたが、最後にお粗末なところを見てしまった。それでもフェリーは定刻通り出航して３時間ほど後の 16.35”長崎港に到着した。ここからバスはノンストップで高速を走って順調に福岡に着いたが、市内では渋滞に巻き込まれ雨の博多駅に 19.15”到着した。無事に 19.30”のぞみ９６号に乗車して帰路についた。